# IV 丹沢大山版環境教育学習の基本方針と推進方向 田畑伊織<sup>1)</sup>・糸長浩司<sup>2)</sup>・藤沢直樹<sup>2)</sup>・池野 正<sup>3)</sup>

Principles and Direction of Environmental Education and Learning in Tanzawa-Oyama Iori Tabata, Koji Itonaga, Naoki Fujisawa & Tadashi Ikeda

#### 要 約

丹沢大山地域が抱える多岐にわたる複合的な環境問題を改善していくうえでは、個々の再生事業の展開だけでなく、広く 県民が丹沢大山地域のおかれている状態を理解し、丹沢大山の自然環境資源から享受する恵みを守り、自然再生を担う人 材を育成していくことが必須である。本稿では、地域再生調査チームの分科会であるツーリズム・環境教育学習グループが 調査研究の過程で抽出した丹沢大山地域の恵みとそれを生かす人材の情報を下に、丹沢大山地域を対象とした県民のため の総合的な環境教育学習の基本的な方向について検討した。丹沢大山地域の自然資源、地域文化歴史資源の恵みを、誰 に、どうやって伝え、学んでもらうか、また、その担い手の育成を目的とした、「丹沢大山版環境教育指針案」としての一覧 表を整理した。そのうえで、丹沢大山における環境教育学習の基本方針と推進方向を考察した。

#### 1. はじめに

丹沢大山地域は、都市部から 50km とアクセスしやすい 位置にありながら、豊かな動植物資源が数多く残っており、 さらに神奈川県の水源地域としても重要な役割を果たして いる. 一方で、大気汚染やブナハバチの大量発生、土壌 乾燥等に起因するブナ・モミ等の立枯れ、農作物への鳥 獣被害,登山・観光利用による植生退行,ごみ問題,し 尿による水質汚染, 人工林荒廃等, 多岐にわたる複合的 な問題を抱えている. これらの解決のためには、 丹沢大山 地域がおかれる問題を理解し、 丹沢の恵を守り、 自然再生、 地域再生を担う人づくりを目的とした環境教育学習の推進 が必須である. 本稿では、地域再生調査チームに設置さ れた分科会である「ツーリズム・環境教育学習グループ」 の所属調査員が、調査研究の過程から抽出した丹沢大山 の自然資源、地域資源が持つ魅力を生かし、それらの資 源から誰が何を学び、またそれらを伝える人材育成に関す る総合的な環境教育学習の枠組みの一覧表をまとめる. そ のうえで、丹沢大山における環境教育学習の基本方針と推 進方向を考察する.

# 2. 方法

主にグループ内の調査員によるワークショップ形式(以下, WS と略記)での全7回の検討会を通じて丹沢大山地域における環境教育について,平成16年度及び平成17年度の調査の結果も踏まえた上で整理された事項を,「丹沢大山版環境教育指針案」として一覧表としてまとめる過程をとった.

# 3. ワークショップ形式での検討内容成果

# (1) 第 1 回 WS: 2005 年 6 月 11 日実施

丹沢大山地域での環境教育のシナリオを検討するという ねらいでワークショップ形式の検討会が開催され、まずは 「環境教育」等の言葉の定義、その考え方や現在の検討 事項の整理等を行った。そして、自然再生に加えて人間 の経済活動も含んだ地域再生の視点も加え、「すべての恵

1) 自然教育センター 2) 日本大学生物資源科学部 3) 丹沢大山 ボランティアネットワーク

みは丹沢から」というテーマのもと、丹沢大山版環境教育のねらいを「丹沢の恵みを守り育てる人づくり」とまとめた.

#### (2) 第 2 回 WS: 2005 年 7 月 4 日実施

「丹沢の恵み = (環境教育における)素材・資源」及び「人づくり」として誰を対象にするのか(環境教育の対象者・学ぶ主体)が検討された。まず、「丹沢の恵み」については、要素を出し、それらを分類、以下の8項目に整理した。

- ①水(滝・湧水・地下水・雨・河川)
- ②景色 (滝・眺望・四季の花・紅葉・ブナ林)
- ③森林(自然・土・ブナ林・人工林・里山)
- ④産物(木材・温泉・食べ物・鉱物)
- ⑤文化(山岳信仰・村並・祭り・里山)
- ⑥アウトドアフィールド (立地条件・親水性)
- ⑦生き物 (種・多様性)
- ⑧地形・気候(雪・雨・ランドスケープ・地質)

また、対象者・学ぶ主体についても同様に以下の8項目に整理した.

- ①登山者(団体·個人)
- ②観光客
- ③地元(地元でなりわいとして生計を立てている人)
- ④市町村(行政·社会教育)
- ⑤無関心層
- ⑥指導者・研究者
- ⑦丹沢への受け入れ業者 (旅行会社・宿・施設)
- ⑧学校教育というエリア (昨年度の調査で今後環境教育の主要な展開の方向性の一つとして挙げられた)

「丹沢の恵み」と「学ぶ主体」のそれぞれ8項目をマトリックス表でまとめることが提案された.

# (3) 第 3 ~ 4 回 WS: 2005 年 9 月 19 日, 10 月 14 日

マトリックス表の原案が示され、その形式と記述内容について検討した.「丹沢の恵み」を通して伝えたいテーマ、「学ぶ主体」に対して伝えたいテーマについてそれぞれ8項目ごとに丹沢大山版環境教育のねらいにつながる形で検討し、「丹沢大山版環境教育指針案」の枠組みがほぼ決定した.

(4) 第 5 回 WS: 2005 年 10 月 22 日

「丹沢大山版環境教育指針案」マトリックス表のなかの個々のマス目の方針について検討された. 更に, 学ぶ主体それぞれに対する環境教育の進め方としての「仕掛け・手法・手段」について付加することとし, 本調査結果をもとに記述が加えられた.

#### (5) 第 6 回 WS: 2005 年 11 月 28 日

前回に引き続きマトリックス表の個々のマス目の記述方針について検討された。この中で、表の各マス目には現状と今後の展開案が記述されることとなった。また、学ぶ主体それぞれについて「(現状で)環境教育を担う主体」「(再生目標としての)理想像」を表に加えることが提案され、記述が加えられた。

# (6) 第 7 回 WS: 2006 年 1 月 27 日

「丹沢大山版環境教育指針案」表の記述内容について、 昨年度・今年度の調査結果をもとにさらに検討が加えられた。情報の追加,他の調査事項や提案事項との調整を加え、 表として完成した(表 1).

#### 4. 丹沢大山版環境教育指針案

表1に示す「丹沢大山版環境教育指針案」については、平成16年度及び平成17度の調査結果を反映しながら、ツーリズム・環境教育グループの調査員によるワークショップ形式の検討会でまとめてきたものであるが、より現実的なものにするためにはさらなる内容の検討が必要であると思われる。特に「丹沢大山の恵み(環境教育の素材・資源)」については、その整理とそれぞれのねらい(伝えたいテーマ)について、各調査グループの協力を得ての情報提供・見直しが望まれる。これは具体的なプログラムの作成や展開を考えるときには必要な作業である。また、この指針案を誰が(どこが)中心となってどのようなネットワークで展開していくのかという実際に動き始めるための検討も必要である。

実際、「仕掛け・手法・手段」に関しては、現在の神奈川県自然保全センター内に環境教育推進に関係する部署、もしくは担当を置き、施設や団体のネットワークづくりとそのコーディネートに当たるのが妥当であると考えられる。更に、具体的なプログラムづくりもしくは現在あるプログラムの指針案にもとづく整理と、指導者の育成もしくは現在の各団体・施設のになう部分のポジショニングをいかに進めるか、また、それらを含めた丹沢大山版環境教育の情報を一元化し、いかに提供していくかの仕組みづくりが必要である。これらの点について、今回の総合調査の成果である総合的な組織としての丹沢再生委員会内に、環境教育学習分化会等を設置すること、また、県庁行政内部での教育分野と自然再生分野との協働による組織的対応が緊急に必要となっていると指摘できる。

# 5. おわりに

#### (1) 丹沢大山版環境教育学習の基本方針案

「丹沢大山版環境教育学習」の基本方針案を以下として 提案したい.「丹沢大山地域の自然の再生,地域の再生 に関心のある人達を育て,また,再生に積極的に取り組む 人達を育て,その人達が協働する場を持続的に提供して いく. 丹沢の多様な恵みとその保全再生,麓での暮らしの 意義を実感・体感できる環境教育・学習とその情報の持 続的更新と発信をする.」

以上から、環境教育とそのための情報発信に関する基本的目標を「丹沢の恵みを守り育てる人を育成する」とした. 多様な生物が生息している丹沢.人間活動の影響により存続の危機にある自然、多様性の危機を抱える丹沢.一方で、その自然の荒廃は、麓の鳥獣被害を伴い、山麓での人間居住環境の危機的状況にあり、人間による身近な自然の的確で持続的な管理と利用の再生も必要となっている.

丹沢地域は、県の水源地域としての価値と意義を持ち、その安定的で質の高い水の確保、安全、安心な水土環境の再生が重要であり、この点に関して、県民の幅広い理解、現場を訪れることで体感的な理解を深める必要がある。また、麓集落では、かつては丹沢から多くの生活、生産の糧を得た暮らしをしてきたが、その関係性が希薄化する今日、改めて、日々の暮らしの中で様々な自然の利用法の智慧を伝える。自然との「つきあい方」として地域に根ざした文化・歴史を伝えることを地域ぐるみで進め、また、新しい山麓でのエコロジカルな暮らしの魅力を創造し発信していくことが求められている。大都市近郊にありながら、山岳、森林、渓流、麓の山村的暮らしとなりわいの再生の意義と、その具体的な体験、学習の出来る機会と場を提供していく場として位置づけた。

#### (2) 環境教育学習の推進方向

以上の丹沢大山版環境教育学習を推進していく上で,以下の具体的な事業展開を提案した.

#### A. e-TANZAWA での環境情報発信の一元化・統合化

丹沢大山地域の自然環境と自分の生活は深いかかわりを持っている(興味・関心を持つ)ことを広く都市住民に知ってもらうための e-TANZAWA 等での情報・広報活動の推進・情報提供のシステムづくりを持続的に進める. 併せて, 経済的マーケティングともつなげ, 丹沢からの食・木材等の物流システムづくり, 丹沢産の情報発信を進める.

#### B. 丹沢大山暮らし・丹沢環境教育推進協議会

丹沢大山環境・暮らし教育プログラムと教材の作成とビジターセンター、県及び各市町村の環境教育施設の連携による「丹沢大山環境教育推進協議会」(仮)の設置による総合的な環境教育の推進をはかる.人材の交換も活発化させる.既存施設・組織の役割分担の整理・調整・情報発信するための協議会を設立する.まずは、連携のための連絡会としてスタートしていく.

# C. 丹沢学会(仮)の設置

地域の自然再生という視点での連携・指導者育成・教材開発、研究調査とその結果の活用が必要であり、生き物、土・水、暮らし・なりわいに関する情報交換のできる、「丹沢学校」(仮)、「丹沢学会」(仮)を設立し、学術的情報、民間情報の交流・交換の場をつくる。e-TANZAWAのネットワークも活用した、eーラーニングプログラムも開発する。

# D. 丹沢大山山村体験交流事業

丹沢の自然・価値を体感・実感の経験を持った子供達を育てるため、将来の自然再生の人材育成のために、年間(1~6年間)を通じた環境プログラム推進・水源地域への山村留学制度推進・丹沢アンテナスクール制度(都市部の小学校と源流部の連携・交流)を設ける.

# E. 丹沢暮らしマイスター制度

麓に暮らす人達に対して、地域の自然・文化には価値

表 1. 丹沢大山版環境教育指針案

根拠となる データ	施設・NPO ヒ メリング・オ イリング・オ イナ会社 ヒプリ ソグ・アンケ ート、登日者 意識調査	中町村 WS と ヒアリング、 商業済価観光 無の観光魅力 創出事業報告	都市住民への アンケート	学校アンケート 活躍、NPO アンケートと ヒアリング	春・青根での 版り組み、市 町村 WS とヒ アリング			施設・NPO ヒ ア リング・ア ンケート、エ コシーリズム 先進事の開査	117-発信事業 での旅行会社 ヒアリング・ アンケート	
実施者になりう る母体 (連携が課題)	潜揚巻口・巻口 は補係活動等: 中奈川県勤労者 日毎連盟、みら く山の会、西丹 沢の自然にふれ あう会、自然に あう会、自然公		群歴・自然観察等: 自然環境保 等: 自然環境保 会センター、環境科学センタ 一、大学、県立 博物館、VC等	南南徳・自然職業 毎:自然職場 中センター、 VC、県立両 町、農地等型で ングー、かわめ いの件、21世 記の業、林業計 のの件、21日 にのけ、21日 にのけ にのけ にのけ にのけ にのり にのり にのり にのり にのり にのり にのり にのり	プロジェクトや どりぎ	研修・講座等: 自然環境保全センクー、林業普及指導員等	研修・講座等: 自然環境保全センクー、林業普及指導員等	研修・講座等: 自然環境保全センター、林業音 及指導員等		
母手・子子・子様子・	マンケーメントの大の金属。 (1) 変え (1) できる (2) できる (3) できる (4) できる		を指揮での公開機の声響。 井沢で霧か」の個であることを知ってもの。 ・部に、投放軟質(下回)と観光業者(上回)による情報発信・教育を行う。 ・一部に、対象数(下回)・観光業者(上回)による情報発信・教育を行う。 ・情報報信のンステムムくり・平沢いらの資本材等の整泥ジステム人くり。	・	推断自定数によったが、 地面に取り、 地面に取り、 をとり 様々を解しての取り組みを作りと思える際解を使作る。プロジェクト やとり 様々を解しての取り組みをキデルとして発展させていくはおい。市町十 がたっているようやティガタイド機(上間)をは同じのコニ酸はガイド 解心とを発用するがあるる。。中で小組に収込的場所を示して終め かっていくことを規模、比較け入は1両14件? 即目作をその気にさせる仕 非分析を設置(下記)、					を発き出して アイNNZLWA、等での概念が解し発信の一元化・統合化、特徴・広線活動の 推進・情報指数のシステス件が(主に都作住取に向けて) ・ アグトは加索・電点と繋ぎでして入土を挟む中ではとどグーセンター、 ・ アグトは加索・電子を表します。 ・ アグトは一部で、単立と繋ぎできます。 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
	丹沢の自然と問題 の実態を知り、ただ 発るだけではなく 発気の自然再生に 寄与する登山者	丹沢の麓の自然・地 域文化に触れることで地域との交流 を楽しむ観光者	自分の暮らしにお ける丹沢の価値を 認識できる都市民	丹沢の自然・価値を 体盤でも経験を持 った人間→移来の 自然再生を担う人 材	地域の自然・文化を 認識・継承し、誇り をもって紹介し着 らせるひと	井沢の地域資源を 複合的に指用した 新しい視点での産 業により生活でき るひと		科沢大山の自然再 住という視点から ネットワークを仕 かし、多彩な繋材の 提供、活用のできる 指導者・研究者	P沢らしさを追求 し、国然・地域次化 を機光・教育の資源 としてとらえ出国 しながら、地域と交 消することや楽し めるプログラムを 開発・植供する業本	い :守り育てる する」 [てる)
仮えたいケーケ (学が当体ごと組制像に 近少くために最低時か ぶんくためた最低時か えたおきたいこと)	オーバーユース対策として登山道整備・エコッーリ て登山道整備・エコッーリ スムの導入等の対策がと られている(支持する) マナーの悪化が問題となっている	地域を知り、ならにかがわりを強める(旅行メタイル)を強める(旅行メタイルを変える) にとでならに楽を変えるしたによびできる	丹沢大山地域の自然環境 と自分の生活は深いかかわりを持っている(興味・ 問心を持っている(興味・ 関心を持つ)	開水投業・教育旅行に活用できる(カリキョラムに該リンれたののに格好の学習業材がある)	地域の自然・文化・産業に 打価値があり、町おこし・ 人様めの業材になる(伝 承・趙り起こし、見直し・ 再発見、勝りを持つ、来訪 者受け入れの態勢・意識)		地域資源の重要性を認識 する、予訳大田地域と、そ こでの自然再生という観点での関係事生という観点での関係事業を関の連 熱・整備が必要である	地域の自然再生という視点での連携・指導者育成・ 教材開発、研究調査とその 結果の活用が必要である	特定の場所に集中する間 個がある一方あまり知ら れていない静かな場所も ある。回体登山者には対応 が必要である一方、教育旅 行、エコツアーの業材・ニ 一ズも重要である	ねらい 「丹沢の恵みを守り育 人を育成する」 (地域を育てる)
レジャーの場 アウトドアフィールド 立地条件・親水性	現状: # # # # # # # # # # # # # # # # # # #	現状:温泉、食へ物、キャンイケ里県水原電池。多がた 活動があることを知らない。 今後:上記以外の楽しみ方を 知り実践する。自然、地域文 した。地域との交流を楽 しむ		んどない。 5かることを知り、学校教育・教	現状:温泉、食へ物、キャンイケ里県水原活動、参称な 活動があることを知らない。 今後:上記以外の楽しみ方を 有り、実践する。自然・地域文 のり実践する。自然・地域文 した。				国鉄・選条、食べ物、キャン プなと興味が限定的。参称な 指動があることを知られい。 会称・主題がどの第しな方を 知り、日終・地域文代に触れ 地域と交流して楽しめるプロ グラムを開発・機様十る	大都市近郊にあったがら業林 や木辺等層かな自然が残って いる場所である
照史・文化・人と自然 運動	型状:間山の飯物・文店にあまり 限とを示さない いくいく (*) できまされらに関味を持ち、よく利用するようになるこれらに関味を持ち、よく利用するようになる	開発・開心を示さな。 17年、開心を示さな。 17、あるいは、温泉・そばうちなど限られた分 野しか知らない。 4後:14ちに興味を持ち、よく利用・るよう になる、地域との交流を楽しむようになる。	現状: 斉沢大山地域の歴史・文化・産物につい てはたんと知らない。 今後: 丹沢底の締める博館的に消費することな どその豊かさを認識・活用する。	いない、原用するための機能が正と 特殊により、神奈川県に存在という参近な自然が	知我・職者・組織によってこれらについて指す 合理を含っている 今後・最米・教育確保として再認識し、これら に対する無条項を指数が指定の立だする			Dateのとう 現野に置き、専門知識を伝えることができる	現実・政内の議長、事性仏閣、複形以外に観光 質額を発掘していない。コメスメログラムを確実や 会後、グリーンツ・コメスメログラムを確実や N PO など・協力して開発し、都用住民に向け た権職発信を行なう	等のLの中で様々な指 様の自然の引用性(微 7j.として地域に関 様)がある あるたと・環臭が ある。
環境・自然立 職・務水・地 連・ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	複数: 機能や水力型のは動催しているが、それを係るしようという機能であったが、発達であったが関係になった。 今後:影響や水の大型さを機解し、保全活動にも参加 する	提供: 養婦やなり知らかの場合が不足 ・今後: 養婦や水のも知らを響解し、保保(情報やボラン ・タイが指しと確定とかめらる最末の一種として楽し かるようによる。 整度など開発的な保全関係にも参加 する	現状:水部地でかることを知らない。地形、発眼に確 作:10つとことも知らない。 今後:10つと指定かがかつていることを知り、別地 を訪れたり、保全に能力する	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	製作、販売の開発とからかりでは近し、予労・大山 地域の関係に乗みの観点、乗りを持っていない。 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	現状、厳廉や水がおおは指揮しているが、それを係 金しようという変観に思しい 今後、紫簾や水が大切なを開催し、保全活動にも夢印 する。繊光・教育の実施としている。 それを人に伝 する。繊光・教育の実施としている。 それを人に伝	現状、厳寒やかなりおは自然でしているが、それを除るしたりというな概にのして 全にようセッジを概にのして 今後、影響やから知るを当時に、保全活動にも参加 する、水、影礁における件形のしたを追求にプランド として確立する(服務者との連携)	現状:専門分野以のネットワークにより、地域の緊急全体を現る機・異分野とのネットワークにより、地域の緊急を発	版状、厳重なながおおのは記載しているが、本さる条件を表しまったりません。 後世紀において、 6条を指記にも 1年のようとなりなりを表記にも 1年のようとは、 1年の名の名前第二巻四十ち、 1年の名の名前第二巻四十ち、 1年の名の名前第二巻四十年とは、 1年の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の	機能の水源 地上でボー 保中機能などの 地上でボー 大作られた地形 形に重要で は、神杯の確成 れらを構成する あら、実証報 なんとかって
自然・生き物   森林   自然・子・本   本   本   本   本   本   本   本   本   本	ないます。ケップスを開めた た生物に1の単株を持つていない できた。生物を解析的体を計画なる等し でもら、ならに、体力を出かして高 脂肪吸でのガイドや顕宝・保全に能力 する	現状: ブナ、シカ、ツッジなど限られ た生参約にした観味を持っていない 今後: 生物の様性の発金にも関いを持ち、保金活動や表す ち、保金活動やボランティア活動も植 減とかかわる魔光の一膜として楽しめ るようになる	現状:神奈川県に丹沢という毎近な 自然があることを知らない。今近な 今後:神奈川県に丹沢という身近な 自然があることを知り、議会があれば これを利用したり、保全に能力する	・ 大学 一般である。 ・ 大学 ・ 大学	現状:地元の自然とかかわりなく生活 し居住地級の生き物にあまり間心がな 今後:都市部との交流 (イベント、そ の他)等により、地域の生き物を観光・ 教育資源として認識する		現状: イナ・タカ、ツッジなど限られ た生き物にしる興味を持っていない 「服者」という類点で生き物とかかい っている。 今後: 生物多様性の保るに関いを持つ 生き物そのもの、またそれらどのかい カリガを観光、繋背の資源としてとら え活用する。		5、ツッジなど限られ 現状を持っていない 19年をは同じを持つ。 かと 地域とのかかわり 数件の資源と してとら	金様元生物の 藤や花葉林江での 多様元生物の 藤舎により地域の 生息している。 生態系・人間形態の 毎により発表。 延齢でしている。 毎により発表。 延齢をかしている。 毎により発展。 現存解の危機に などの関節が 生まれている。
惠み (素材 ・資源) 学ぶ主体 (対象)	登山者 (国体・個 現在の 人) 土利用 者 者 用	観光客	都市住民	利用者 学校教育 (無限 というエ 心層)	地元住民 (地城間 辺部)	なりわい 周囲係者 (林樂・農 業・極場優 業者)	国・県・市 国 (市 国 (市 関係者 政・社会教 (どち (どち	いうと 相い手) 指導者・研 的者層・法 ランティ ア団体	丹沢~00 	伝えたいテーマ (ここ代類かの「恵 み」つまり素材がな世 大切なのかという理 由、素材のおののの 価値を判解にする) より弁形のしさを強調 した表現にするへき。

があり、町おこし・集客の貴重な素材(伝承・掘り起こし、 見直し・再発見、誇りを持つ、来訪者受け入れの態勢・ 意識)になるものが多くあることを認識してもらい、自然と共 生した暮らしの豊かさを再認識してもらう。そのために、丹 沢版の自然共生型の豊かな暮らしについての学習・教育 システムを構築する。麓の暮らし、なりわい、自然環境に ついてのガイド育成(丹沢暮らしマイスター制度)をはかり、 地元の価値を案内できる人を育成する。

# F. 丹沢なりわい人育成支援事業

丹沢の自然資源,地域資源を複合的に活用した新しい 視点からのなりわいをする人達を育てるために,「丹沢なり わい人育成支援システム」をつくる.

### 謝辞

本稿での調査・研究に当たりご協力いただいた地域再生 調査チームの関係者の皆さまに謝意を表します.

# 文 献

環境教育事典編集委員会編,1999.新版環境教育事典. 700pp. 旬報社,東京.